

アカシア夜話 アカシアンナイト

第6話



昭和40年代のアカシア会

1967(昭和42年)年4月17日第1回の月例アカシア懇談会が開催されました。アカシア会は1951年(昭和26年)に再建され、会則は1961年(昭和36年)に制定されました。しかし現在の組織や活動の原型が作られたのは、月例アカシア懇談会の定期開催が始まり、創立70周年の記念事業が行われた1975年(昭和50年)4月までの間です。今回は、昭和47年に帰広されると同時に、アカシア会の活動に尽力された川妻二郎(36回)さん(広島管財(㈱会長)に、当時のお話をうかがいました。



川妻二郎氏(2009年10月17日撮影)

月例アカシア懇談会

1972年(昭和47年)に、それまで勤めていた帝人を辞めて広島に帰って来る事になりました。前年にビルメンテナンス業を起業していた父(8回 川妻卓二氏)から、後を継ぐ気持ちがあるのならこの1年のうちに決めて欲しいと言われ、いろいろ悩んだ末に広島に帰ることを決めたのです。帝人時代には、長沼電業の長沼博(33回)さんが、当社長をされていた徳末智也(23回)さんを訪ねて来られ、その後に僕の所に寄られるという事が度々ありました。その長沼さんが、「お前、広島弁がしゃべれんで、広島で商売どうするんじゃ」と言われるんです。実は僕は広島で生まれたけれど、父の都合ですぐに大阪に行き東京を経て、小学校5年生で皆実町小学校に帰ってきました。附属中学を受験して運良く合格したので、アカシアの会員になる事ができたのです。そんな訳で小学校の同級生とはどうしてもつながりが薄く、附属中学での交流が一番でした。さらに、同期の二井谷彰君も「おい、川妻よ。広島で商売しようと思ったらね、まずアカシア会という同窓会があって、これが上から下まで全部集まるんだから、そこへ行ついたらすぐ顔が広がるから、来い。」と、こう言っています。本当は当時、二井谷君が一番下っ端で、弁当の手配から何から全部やっていて、代わりになる人間を引きずり込みたかったというのが真相のようでした。

帝人時代も東京アカシア会に出ていますが、こうして広島に帰ると同時に、

地元のアカシア会でお世話になる事になりました。この時、6期下の松林孝昭(42回)君とペアを組んでお世話をしたのが、以後当番幹事制度として定着し、自立した持続可能な制度として今に続く事となっています。また、会報を担当した増田尚雄(43回)君は20年以上にわたり会報の印刷に係わってくれました。

当時のアカシア会幹部

●会長 村田可朗先輩(8回)

アカシア会会长は、中国電力副社長から中電工の社長に転じられた村田可朗さん。「べくろうさん」と慕われていました。

●幹事長 原幸夫先輩(17回)

源田三兄弟の事をご存知でしょうか。長男の源田実(広島1中)さんは真珠湾攻撃の航空参謀で、戦後参議院議員などを歴任されました。次男の源田松三(8回)さんは、大蔵官僚から戦後加計町長をされた方で、当時自治体では珍しかった労働争議に対して、一歩も引かず頑張りぬいて一躍有名になりました。三男の原幸夫さんは、白島の造り酒屋「原本店(蓬萊鶴)」に養子に入られた方ですが、通産官僚で広島通産局の局長を退任された時に、「もう広島を離れたくない」と、辞めて広島に残されました。この方が月例アカシア懇談会創設の中心人物であり、幹事長としてアカシア会の采配を振るっておられました。

●筆頭幹事 藤居平一先輩(24回)

初代日本被団協事務局長をされた藤居平一さんの事は、第4話にも書かれていましたが、常任幹事の中でも筆頭格で、原幹事長を非常に尊敬されていて、月例アカシア懇談会をはじめ、色々とアカシア会の活動に献身していました。

その頃、同窓会の基本的な要件として、「名簿がしっかりしていること」「会合を持って顔を会わせること」「会費を取って財政基盤があること」これが会が存立する大事な三要素、ということを藤居さんが言って。僕もそれに賛成して、だんだん引きずり込まれていくという形になつたんです。この三要素の他に、政治を持ち込まないという事もよく言われて、70周年の式典の時は、政治家は壇に上がらせないよう準備をしていたのですが、選挙の前だったのか皆登壇させろと騒ぐもんだから、收拾がつかなくなつて「まあ、しょうがないじゃろう。」と登壇させて、紹介するはめになつました。

僕は藤居さんに反対意見も言つたりしたんだけど、なぜか可愛がられましてね。家に呼ばれたり、電話が度々あつたりしました。電話も長いし、訪ねていつても長かったです。

ロビイスト?

藤居先輩は、今で言うロビイストのような人で、交際の範囲も広く、自分では表に出ないので、でも力のある人でした。早稲田出身で、広島で稻門会をやるので、総長室に行って総長を引っ張り出したり、戸塚にあった校舎の移転にも関わったりされました。

アカシア会で最初に国会議員になった村上孝太郎(25回)さん(元大蔵次官、参議院議員、当選後数ヶ月で早逝)の選挙の時も、一生懸命駆け回っておられたんですが、どうも1年後輩の村上さんを通じて、原爆の国家賠償をやって貰い、広島を立て直す法案を作らせようという意図があったのではないかと思います。

日本を動かす3次官

藤居さんにまつわるアカシア会の逸話に、田中敬(32回)大蔵次官、井内慶次郎(32回)文部次官、栗屋敏信(35回)建設次官の3次官祝賀会の話(第1話)があります。この方達にも良くお会いしました。藤居さんに付いて行って同席した時、色々話をする中で、藤居さんが「あんたの方の中から、政治家になる者はないか」と。井内さんが断って田中さんも断った。それでとうとう栗屋さんになって。後輩だし、建設省という事もあり、当選する確率も高いと思いました。退官後、1983年(昭和58年)の総選挙で落選して貧乏くじを引いた格好でしたが、落選を糧に、1986年(昭和61年)の総選挙で初当選しました。

こんな経験ができたのも、単なる東京のサラリーマンでは無理で、アカシアだったればこそと感謝しています。

最近の母校に思う

先般、湯崎英彦知事(75回)が母校で生徒を前に講演するというので、学校や生徒がどんな反応をするか見に行きました。高校生への講演では、沢山の生徒が座席の小テーブルにうつ伏せになって、質問の時も活発じゃないし、あきて帰ってしまいました。中学生は、もっとちゃんとしてたらいいけれど、先生方の中にも校歌を歌つてないように見える人がいて、僕らの頃と隔世の感があり、残念でした。

編集にあたって

昭和58年の総選挙の時、初めてお目にかかる川妻先輩は、凛とした立ち姿でアカシア有志の会を仕切っておられました。時を経て当時の先輩と同世代になりましたが、まだ学ぶ事が多いようです。今後も変わらず、後進をご指導頂きますよう、お願い申し上げます。

文責・編集：甲斐 稔(63回)

編集：河本良子(63回)
